

「育つ心」と「老いる心」 ～ライフヒストリーにおける転機～

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科
医療科学専攻生命医科学講座(形態学群)
形態制御解析学分野(旧解剖学第一)教授 森

望

長年の研究商売から大学に身を転じて戸惑うことが少なからずある。予期せること、予期せざること、さまざま。高等教育の先頭に先端的研究が配される昨今にあつては、研究の価値は高い。これは研究そのものの価値ではなく、「研究」といわれるものに期待される価値である。だから、研究だけの専門馬鹿であってもそれなりに評価される。そして、私の場合、転機が訪れた。

日本の多くの人とは本質的に植物的人生を送る。土地に根ざした、同朋に囲われた生き方である。私の場合は、期せずして、動物的に生きた。流浪の人生である。定住はない。大学を卒業してから、職場は2年から5年で転々とした。追われたわけではないが、自分からあえてそうした。そうするように自分を仕向けた。大きな研究をするには十分な時間を必要とするが、研究者として育つためにはそれほど時間をかけてはいけない。かけられない。いや、育ちながら、すでにプロになっている。医療の道も、科学の道も、この点では同じだろう。いろいろな職場を、研究室を転々としながら、そこで吸収できることを1～2年で学んだ。だから、3年以上籍を同じくするよりは、移ることを考えた。そうすることで、また、新しいことを学び、また古い皮を捨てた。

大臣任命の管理職ポストを捨てて、ま

た50を過ぎていても、自分にとって新しいチャレンジをしてみようという気になったのには、いくつかの理由があつた。中でも、選考のプロセスの中で迷う自分の中に強烈に入り込んだ言葉がある。ある教授が電話の中で言ってくれた。「大学は人を育てるところです。」「長崎から世界にはばたく医療人を育てたいのです。」それを聞いて心が震えた。その一部でも自分が貢献できるのなら、期待されるのならばと、また動物的に動くことを意識した。「人を育てる」面での新しい仕事も、また従来の研究面でもまた新しいことができるだろうと思つたし、そう思えた。誰もが未来に期待する。その時の私もそうだった。大学人として大きな志をもつ若人を育てよう。長崎に根をもちつつも世界を視野に先端を翔る医療人を育てよう。自分も新たなことを学びつつ、学生教育の一助ができれば、これ以上うれしいことはない。

研究の面での新たな思いは今年の夏にとりまとめてActa Medica Nagasakiensiaに書いた。「Rooting “Ko-ko-ro” into the brain: Toward the neuroanatomy of mind (こころを脳に根ざす: 心の神経解剖学へ向けて)」と題した。西洋式の脳の解剖も長崎を通じて京都や江戸に伝わった、そのころにも思いを馳せた(図1)。脳の中で「こころ」がどう形成され

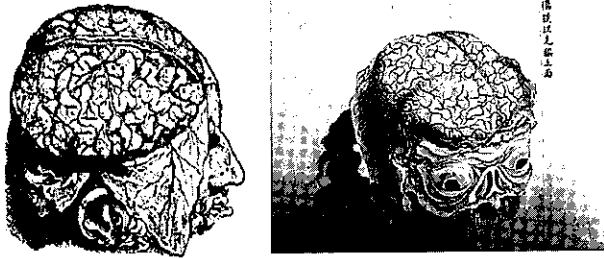


図1

るか、心の脳地図がどう描けるか、その現状を概観し、今後を見通した。正直なところは、この先どう進むかわからない。神経解剖の教授職を拝命して、その職責から、神経解剖の教科書類も啓蒙書もざっと眺めた。難解である。しかし、そこで理解したことは、すべて、過去のことだということであった。ここに「科学(サイエンス)」を意識する人間と「学問」を意識する大きな狭間がある。解剖についてはほぼすべてわかりきっていた。自分が「発見」するもの、自分が「新たに生み出す」ものはなかった。ない、と思われた。しかし、人間の高い精神性である「こころ」の脳内機構を考えてみると、まだまだ科学の対象になる。心は脳のどこにあるのか？

「育つ心」「老いる心」の背後に、いったい何があるのか？そのことを考えながら書いた。この論考のきっかけとなったのは、一人の少女の死である。ひとつの理解し難い事件だった。それが、たまたま赴任の日、発令の日起こった。

発達期の脳は不可解である。老化脳も不可解である。だから「科学」として成り立つ。「リサーチ」の

意味がある。当時思ったことは、幼若期の、あるいは、発達期の不安定性はどこに問題があるのか。これを、従来の自分の専門とする神経科学的な基礎研究だけでなく、精神科や教育学の視点を併せて、応用的な理解を求められないか。これが、赴任後、一番に考えた「育つ心」への原点である。これは、今、教育学

部の上菌教授の主催する「心の教育総合支援事業」のプロジェクトの一端として精神科の小澤教授とともに考え続けている(図2参照)。

一方で、昨今の「老化」の問題で大切なのは何か？巷では「アンチエイジング」もある。「ケアホーム」の問題もある。しかし、一番は「老いる心」「高齢者のメンタリティー」だろう。最近の東京都の老人総合研究所の公開市民講座のテーマにもなった。そこで、東大の解剖を辞められた養老先生とも議論した(図3参照)。高齢期に人はだれもが自らの生を振り返る。そこにはその人の歴史がある。ライフヒストリーである。老いる心の中に、脳の中に、そのすべてが確実に刻ま

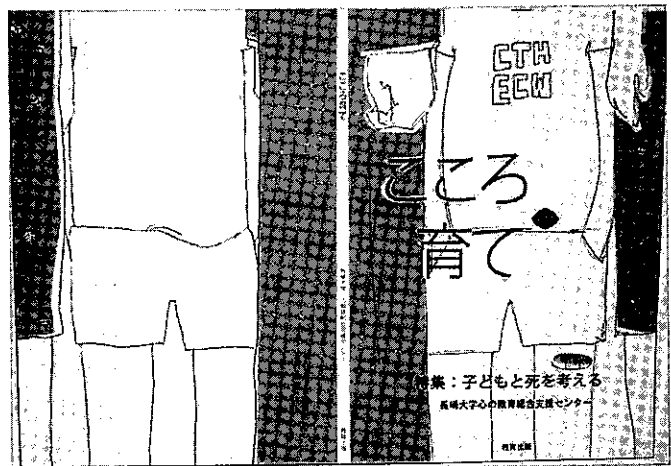


図2

基調講演
高齢期の生き方とメンタリティ

東京大学名誉教授 養老 孟司

① シンポジウム
 ① 脳とこころの発達と老化
 ② メンタリティと健康長寿
 ③ 高齢期のチャレンジ精神

平成17年度
 平成18年
2月1日水
 13:00~16:30

会場
 文京シビックホール
 (大ホール) (1800人)

入場無料
 申込不要

図 3

れている。「老いる心」あるいはその支えはどこにあるのか？答えはまだない。

老化研究に関しては、老化制御が重要になる。幸い、長崎にはカロリー制限による老化制御の第一人者である下川教授がいる。脳からの視点と栄養代謝からの視点とを併せて、老化制御へ向けての重点研究を組むことも、新しい大きなプロジェクトへ向けての楽しみでもある。

「育つ心」も「老いる心」も、もとは、同じ「脳」の問題である。精神科は「こ

ころ」を問題とするが、「神経解剖学」は当面「こころ」を問題としない。問題は「脳」である。神経解剖の世界では、すべてが形として記述される。心には形がない。境界を区別できないことが多少ありはすれ、解剖の世界ではすべて切り崩される。そこに「ない」ものはない。では、ニューロンとグリアの塊である「脳」がどうしても不可思議な「こころ」の世界を編み出すのか？それは「医学」の問題でもあり同時に「科学」の問題でもある。純粋に根源的な問題がある。その背後には「情報」がある。脳の情報とそのゆらぎ、それが、「育つ心」の不安定さであれ、「老いる心」の歯痒さであれ、いずれにせよ脳の経時的な変化の一側面の現れとなる。

脳科学の複合型研究も、老化制御へ向けた大型研究も、まだ、夢の楼阁である。元来、「論説と話題」という巻頭のセッションでは、長崎発の着実に展開している大きなプロジェクトを紹介するところであるらしい。この原稿の執筆を依頼され気軽に引き受け、しかし、書く段になってから、正直、はたと困った。大きな夢はもちつつも、まだ、すべてがすんなり行かない。長崎のブレインは何を見るのか？波頭の先がまだ見えない。巻頭を雑文で終えることをお許し願いたい。